

阿波山

阿波島共云○略中

〔阿波名所圖會上〕鳴門 阿波淡路の境にして、阿波の國板野郡撫養浦にあり、門の間十七八丁、大海より満來る潮も、中國の海より干る汐も、満干ごとに此門にあつまれば、汐のはやき事矢のごとく、水勢のつよき事、磐石の轉倒にたとへんもさらなり、されば順水にあらざれば、風帆も此門を渡事かたし、此門の間阿波地より淡路潟へ瀬の巖つきて見ゆれば、水底深しとも見へざりき、瀬の左右は深き事底をしらず、此門干汐の時は一方ひく、なりて、一方より落る水流の如く、満汐の時は大海より汐みちくれば、瀬にあたりて立のぼる浪落れば、ことぐく渦となる、其高々卷あがりたる白浪に、朝日影のうつろふ景色、また門わたる舟の、汐にひかれて飛鳥のごとなるありさま、畫にもいかでとおもふ絶景なり、尋常の汐の満干だにかかる景あり、三月三日の汐干は海原大に高下ありて、倭國第一の瀬戸なれば、鳴門の汐干とてなだり、

高和浦

櫻ヶ池など、云名所有之

〔阿波志板野郡〕山川

小鳴門 在北泊距堂浦一千八十步許、此間兩岸對立如門因名○中略

鳴門 在阿淡之間、古稱速吸名門、日本書紀所謂伊弉諾尊往觀者是也、東岸斗出者淡路行者嶽也、西島、險絕不可陟、裸島之南磯石平敷十餘丈、呼曰千疊舗、西崖平坦有磯石、即公駕遊憩之處。

〔土佐日記〕卅日○承平五年一月、夜なかばかりに舟をいだして、阿波のみとをわたる、夜なかなれば、にしひんがしも見えず、をとこ女からく神ほとけをいのりて、このみとをわたりぬ、

〔土佐日記考證下〕阿波のみとは、阿波のなるとをいへるにや、このつぎに奴しまとあるは、すでに淡路の國のぬしまが崎なれば、阿波のみとは、阿波のなるとにて、道のほどもたよりありて